

## 中国語における外国国名表記の固定と変化 ——対音表記における方言シフトの問題を中心に

千葉謙悟

### 要旨

我们可以说国名是在外国地名书写当中使用频率最高的一种。既然如此，分析其书写受到什么方言的影响以及如何固定下来有助于所有的音译词研究。本稿着眼于美国、法国、英国等三个国家的国名书写，考察现在的略称书写（如～国，～军等）如何固定下来。我们认为其原因在于 1860 年左右所发生的“书写转移”。由于国名书写形式所依据的方言从广州话转变为以上海话和官话为主的“非广州话”，所以引起了书写形式的变化。本文还指出：对音（音转写）这一因素在汉语中并不像我们想象那样无足轻重；同时，本文认为：广州方言对于外国国名书写形式的确定病没有产生决定性的影响。

### 1. はじめに

国名表記は外国地名表記の中で、最も使用頻度が高いものの一つといえよう。従ってその表記がどのような方言の影響を受けて変化し定着したのかを考察することは、外国固有名詞表記全体の研究にとって一つの示唆を与えるものになりうる。

本論では、19 世紀におけるアメリカ、フランス、イギリスの国名表記に着目し、現在標準の表記に用いられる形、特に「～国」「～人」のような二字の複合語を形成しうる略称に用いられる字がいかに形成されたのかを解明する。そして現在の国名表記に固まった要因として、1860 年ごろに起こった広州話から非広州話へという「方言シフト」が重要な役割を果たしていることを指摘する。さらには従来感覚的に言われてきたよりも対音表記における対音が重視されている可能性を提示し、また同じく感覚的に言われてきたほどには広州方言が表記の定着に与えた影響は大きくないと思われることも示したい。

外国の国名表記に関する研究としては、王敏東（1992a, 1992b, 1994）による一連の研究があげられる。これはおそらく中国語における対音による地名表記という存在に関して言及した最初の論考であるが、すべて日本語における表記の変遷を中心に考察したものであって、中国語における表記の変遷には副次的な位置しか与えられていない。中国語における外国固有名詞の対音表記研究はいまだ十分な蓄積が成されていないのが現状である。

## 2. アメリカの表記をめぐって

アメリカ合衆国 (United States of America, 美利堅合衆国) は 19 世紀において、3 つの系統の表記が存在した。1 つは America という語の対音表記である。(注 1) 2 つには United States を対音表記ないしは翻訳表記した系統である。第 3 には広州を中心に用いられた「花旗」という表記がある。(注 2) 本稿では、このうち第一の America の対音表記の系統に焦点を当てて論を進めたい。

対音表記に基づくアメリカの表記はたいてい [ə.me.rə.ka] (注 3) と区切って 4 字を用いるが(注 4)、これには 1 つの明らかな転回点がある。それは略称にも用いられる第 2 字目が 1860 年ごろを境に「米」から「美」へと変化しているという事実である。19 世紀中に出版された文献において、1860 年以前 (以後「前期」と略称) には「米」を用いる表記 (以下「米」系と略称。他もこれに倣う) が 12 例に対して「美」系が 8 例、1860 年以後 (以後「後期」と略称) には 3 例に対して 14 例と、「美」が「米」を上回るのである。(注 5)

さらに、より公的な表記の状況を調べるため公文書ではどのような表記がなされているのかを調査した。公文書に用いられた表記は定着に関して大きな影響力を持つからである。材料としては、外国名の表記が豊富な教案関係の文書を用いた。テキストは中国第一歴史檔案館・福建師範大学歴史系 (1996) 第 1 冊および第 2 冊である。(以下『教案』と略称) これは公使館と総理衙門の間で交わされた大量の照会文書、宮廷での奏請、上諭などを含み、また 1840 年以前からの公文書を継続的に収めていることから、量的・質的に十分な例証を収集することができた。

『教案』によってアメリカを表す表記の変遷を見ると、これにも 1860 年を境に大きな変化が起きていることが分かる。すなわち、前期には「咪喇」「咪」「米」といった「米」系の表記が 18 例、「美」「大亜美利駕合衆国」という「美」系の表記が 0 例であるのに対し、後期は前者が 0 例、後者が 246 例という逆転が起きているのである。(注 6) 「米」から「美」へとこの変化が 1860 年を境におこっているのは明らかであろう。1860 年以降、少なくとも教案関係の文書において「米」系は用いられなくなっていたのである。これだけ明確な変化があるということは何かの要因があるものと思われる。

それは、各地の方言においてそれぞれの漢字が持つ音の影響に他ならない。ここで、いま「米」および「美」について 19 世紀当時の発音を見れば、「米」の音韻地位は蟹摂開口四等上声齊韻明母であるから、広東では [mei<sup>13</sup>]、上海では [mi<sup>113</sup>]、南京では [mi<sup>22</sup>]、北京では [mi<sup>214</sup>] という発音になる。止摂開口三等上声旨韻明母の「美」は広東で [mi<sup>13</sup>]、上海で [me<sup>113</sup>]、南京で [mei<sup>22</sup>]、北京で [mei<sup>214</sup>] である。19 世紀中葉の発音について現在との関係で特に注意すべきは、広州音における差異の存在であろう。すなわち高田時雄 (2000)、陳万成・莫慧嫻 (1995) に指摘されているように、止摂開口の唇牙喉音について韻母が現在の [ei] ではなく [i] であったという事実である。

さらに、前期で「米」系の表記を持つ文献は、多くが広州音による表記を持つ。たとえば Morrison (1838) の「米利堅国」、『澳門新聞紙』(1839) の「咪喇哩」などがそうである。広州音では「米」の主母音に非円唇・中舌の広母音 [e] が含まれ、現代普通話のように完全な非円唇・前舌の狭母音 [i] にはならない。一方で、[me] の対音として「美」を用いる文献は、多くが上海音か、南京音ないし是北京音を基礎とする官話音（以下、官話音と略称）で表記していることが読みとれよう。したがって、1860 年以降にあらわれる「美」字は大半の場合、[me<sup>113</sup>]、または [mei<sup>214</sup>] として読まれるよう意図して表記されていたことを意味している。

つまり、America [əmerəka] の非円唇・前舌の半狭母音 [e] の対音は、中国語において単なる狭母音である [i] よりも、広州話の [e] や上海音などにおける [e] のほうが好まれた可能性があるということができよう。

### 3. フランスの表記

本節ではフランス (France・法蘭西) の表記例をとりあげる。19 世紀初頭では「仏」が優勢であった。徐繼畬 (1848) には、各国の国名表記の「又名」が記載されているが、その巻四では「仏朗西、仏蘭西・法蘭西・仏郎機・仏朗祭・奧廬・奧祿・牙里亜 (筆者注：読点以後は割注)」と「仏」系表記のほうが多く現れ、『瀛環志略』自体も「仏」ではじまる表記を見出しに立てていたことがわかる。

しかし約 50 年後の丁韞良 (1895) では「法蘭西、省称法国。旧訳作仏蘭西」と記されている。すなわち「仏」系の表記は「旧訳」とされ、「法」系の「法蘭西」のみが本文中で用いられる表記であり、「法」系がすでに定着した表記であることを伺わせる状況になっているのである。

この変化が起こった時期を考えると、上述のアメリカの例と同じく、1860 年を境として、フランスをあらわす最初の字が「仏」から「法」に変化していることが読みとれる。なぜなら、「仏」表記は前期：後期=16：4 であるのに対して「法」字は 3：16 となるからである。また『教案』を用いて比較すれば、前期においては「仏」対「法」は 118 対 3 であるが、後期においては 9 対 1031 となる。数量において「法」系が「仏」系を凌駕していることがわかるであろう。

France の英語による発音 [frɑ:ns] において [f] は子音のみで母音を持たないことから、中国語では後続する音によってどのようなように聞こえる可能性を持つ。つまり中国語の対音では、すでに存在する声母 [f] を除けばどのような主母音や韻尾、声調を与えようとも問題ないはずである。(注 7) しかし上のような明確な用字選択の変化には、なんらかの理由があると思われる。

「仏」系表記は Morrison (1828) や裨治文 (1838) といった、主に広州音で読まれたであろう文献に記載されている。ただしこの系統の表記は徐繼畬 (1848) のように、主として官

話音で書かれた文献にも現れる。さらに後世の地名表記に比較的大きな影響を与えた瑪吉士 (1847) も「仏」を用いて表記しており、「仏」系表記の優位は揺らぐ理由がないように見える。にもかかわらず、1860年頃を境に「仏」は「法」に優勢な表記の座を譲ったのである。

一方で、「法」系の表記は、1850年代の慕維廉 (1851) や慕維廉編 (1857-1858) に見出しとして用いられ始め、馮桂芬 (1857) や丁韞良 (1864) などでも「法蘭西」という形で見出し語としての地位をもって引き続き用いられている。これらはみな上海で書かれた文献である。

この時期の「仏」系表記は理雅各 (1856) や王韜編 (1874: 7/31) のように香港で出版された文献であることが多い。こうした例外を除けば、上海で出版された文献では主として「法」系表記を用い、「仏」系が排除されているかのように見える。したがって本節で指摘した現象には上海音にまつわる理由があると考えるのが自然であろう。

[f] に対応する「仏」「法」という字についてその音韻地位を見ると「仏」が臻摂合口三等入声物韻奉母、「法」が咸摂合口三等入声乏韻非母である。従って「仏」の19世紀における発音は広東で [fet<sup>22</sup>]、上海で [vəp<sup>12</sup>]、南京で [fu<sup>25</sup>]、北京で [fu<sup>35</sup>] となり、「法」は広東で [fat<sup>33</sup>]、上海で [fa<sup>25</sup>]、南京で [fa<sup>25</sup>]、北京で [fa<sup>214</sup>] である。(注8)

ここでは上海音で「仏」の発音が [vəp<sup>12</sup>]、「法」が [fa<sup>25</sup>] となることが注意されよう。つまり、これらの字が持つ声母に問題があったのである。

上海音で「仏」は [vəp<sup>12</sup>] というように有声の唇齒摩擦音 [v] であり、音声的に France [fra:ns] の [f] に対応しておらず、しかも上海音では無声の [f] と有声の [v] は音韻的に対立していた。19世紀の上海音でも現代と同じく、すでに語頭の濁声母について清音化する傾向があったといわれているが、それはあくまで傾向であったと考えられている以上、はっきりと有声の [v] で発音されることもあり得たのである。一方で、「法」は調査した限りの英華字典類で [v] を持つものはなく、すべて [f] であった。

ここから、上海においては、[fra:ns] の [f] に対応する声母 [f] をつねに持つ「法」が使われるようになったと考えられるのである。

#### 4. 方言シフト

前節までに、1860年ごろを境とした表記の変化を指摘し、その理由として方言読音の差異の存在を挙げた。本節では、非広州音表記をベースにした表記が定着した要因として西学東漸の中心地が広州・香港から上海へ移動した影響を指摘する。すなわち、上海音ないしは官話音に基づいた表記を載せた文献が広まることによって表記の「方言シフト」がおこったことを明らかにしたい。

1842年の南京条約による5港開港までは広州が西洋と接するための窓口であった。その当時の文献が広州音に基づいて表記していたことは想像に難くないし、またそのような記述も

散見される。たとえば徐継畚（1848）の凡例には「…以漢語書番語、其不能吻合者本居十之七八、而泰西人學漢字者皆居粵東、粵東土語本非漢語正音、展轉淆訛、遂至不可弁識」と述べる。開港後もしばらくは広州や香港で広州方言の影響を受けた文献が出版されていた。たとえば、香港で出版された理雅各（1856）などは固有名詞表記のみならず語彙の面でも広州方言の影響があることが指摘されている。（注9）

しかし、上海が開港されたことで広州・香港から伝教の拠点が移される例が多かったのも事実であった。上海は長江を利用した内陸交通が比較的便利であり、さらに北京にも近かったからである。そして、世界地理を含めた西学を積極的に中国語で中国国内へ紹介したのも宣教師たちであった。

したがって印刷・出版機構が上海に設立されたのも自然なことであった。中でもロンドン伝道会による墨海書館の創設は画期的な出来事である。墨海書館（The London Missionary Press）は1843年（道光23）、イギリス人宣教師メドハースト（W. H. Medhurst）がバタヴィアにあったロンドン伝道会の印刷所を上海に移して開設した。翌年に操業を開始し、1860年代に同じ上海に美華書館（American Presbyterian Mission Press）が開設されるまで上海における出版の中心的地位を占めていた。（注10）ここでは墨海書館の印刷量から、上海の出版物が方言シフトを引き起こした可能性について言及したい。

墨海書館における書籍の印刷量は、1844年の操業開始以来1845年までは一つの文献につき1000部が標準的な印刷量で、3000冊以上に及ぶものはわずかであった。しかし1845年に当時最新の輪転式印刷機が到着してからは、一冊につき一万部を印刷することが普通になったのである。墨海書館では1865年（同治4）までに同一書の重版や異なる版本を含め、211種の書籍を出版している。（注11）これを印刷した総ページ数で見れば1844年（道光24）5月～翌4月までに71万ページ、1845年（道光25）5月～翌4月までに222万ページ、1846年（道光26）5月～翌4月までに263万ページという統計が存在する。（注12）また、1840年から1898年までに中国で出版された西学書561種のうち上海で出版されたものは434種におよび、全体の77.4%を占める。（注13）これに対して1843年から1860年までの香港における宣教師による中国語出版物は60種にすぎない。さらにその6割以上を伝道文書が占めている。（注14）数量的に上海の印刷物に及ばないのは明らかであろう。

上海話に影響された表記を含む文献が大量に出現したのが1850年代であるから、時間的に1860年頃を境として広州話の影響力を上回るには十分な期間であっただろう。そして後期には広州話をもととする表記は衰退していくのである。以後も美華書院、江南製造局翻訳処、格致書院などといった翻訳出版機構はすべて上海に設けられ、中国国内に向けて海外に関するさまざまな情報をもたらした。言い換えれば、このような社会的環境が表記の変遷にとって重要な影響を与えることが示されたものともいえるであろう。

さらにいえば、中国語における外国地名表記においては、これまで思われていた以上に対

音という要素が追求されているのではないかと考えられる。この問題については次節でも検討されるであろう。

## 5. イギリスの表記

本節では方言シフトの適用の例外としてイギリスの表記をとりあげ、その条件について考察する。同時に固有名詞表記における対音の重視という傾向も示したい。

イギリスの表記で特徴的なのは、1820年代からの文献以降、割り注などを除いた正規の表記ではほぼ一貫して「英吉利」という組み合わせが用いられているという点である。19世紀におけるイギリスの表記のヴァリエーションを見てみると、いずれも「英」を用いた表記になっている。「英吉利」に対応する「英国」という略称についても、口偏がつくという変種をのぞけば「英」という字以外の表記が現れることはまずない。これは調査した文献では例外がなかった。アヘン戦争以前の公文書を用いて調査しても表記には「英」「暎」のみが用いられている。(注15)

ここで公文書での表記を調べるために再び『教案』によってその表記を見ると、後期には口偏が失われるという変化はあるものの、用いられる字は「英」一種類のみであることが指摘できる。前期には口偏をもつ「暎」が72例、「英」が4例あるのに対し、後期には「暎」がわずか1例、「英」が561例を数えるのである。

これは方言シフトの適用を免れた例であり、方言シフトが必ずしもあらゆる表記を覆うものではないことが分かる。では、その条件がどのようなものであったのか、以下は「英吉利」という表記について分析を加え、その要因について考察したい。

「英吉利」の表記はイギリス船が最初に広東に来航したことからも分かるように広州音に基づくものであると考えられるが、その発音は [jɛŋ<sup>55</sup>ket<sup>55</sup>li<sup>22</sup>] である。「英」という字は中古音の音韻地位でいえば梗撰三等平声庚韻影母であり、同音字には『廣韻』によれば9字が存在する。すなわち「霽」「鏃」「鶻」「鶻」「瑛」「橫」などである。しかし、イギリスの表記に用いられる「英」以外は常用字とは言いがたい。ほかにも、上声梗韻、去声映韻ではそれぞれ「影」「璟」「境」「撓」などの8字、「映」「暎」「照」「詵」の4字を見いだすことができる。(注16)

異なった声調であれば「影」「映」という常用字があるにもかかわらず、例外なく「英」が選択されているということは、英語の [ɪŋliʃ] の中でストレスを持つ [ɪŋ] が対応する広州音の声調として平声を要求したという可能性も考えられる。これは張日昇 1986 における英語のストレスと香港話声調の対応傾向にも一致するものであり興味深い。(注17)

とはいうものの、表記に変化がない以上、方言によってその読音が変化することは免れない。「英吉利」という表記は 19 世紀中葉の上海、南京、北京でそれぞれ [iəŋ<sup>54</sup>kie<sup>25</sup>li<sup>14</sup>]、[iŋ<sup>31</sup>ki<sup>25</sup>li<sup>44</sup>]、[iŋ<sup>55</sup>ki<sup>35</sup>li<sup>51</sup>] という発音であった。しかし、表記が最初に基づいた方言である

広州音と比較しても相対的に発音上の変化が小さく、英語との対応について広州音で指摘したことがほぼそのまま当てはまるといえる。同一の表記が多用されていた上に、方言差による発音の揺れが比較的小さかったことも「英吉利」という表記を安定させた要因であったと考えられよう。

これは方言による読音の差が比較的小さければ方言シフトの影響を免れることができるという事例であり、方言シフトが一律にすべての表記に対して適用されるわけではないことを物語っている。「英吉利」の読音は19世紀末までに上海で[iəŋ<sup>54</sup>teie<sup>25</sup>li<sup>14</sup>]、南京で[iŋ<sup>31</sup>teie<sup>25</sup>li<sup>44</sup>]、北京で[iŋ<sup>55</sup>teie<sup>35</sup>li<sup>61</sup>]という発音へ変化する。表記が発音される方言が変わり、またそれぞれの方言音の変化につれて英語の [ɪŋlɪʃ] という発音からは聴覚印象上徐々に遠ざかっていくものの、イギリスの表記は方言シフトの影響を受けることなく用いられ続け、表記が定着したといえるだろう。

## 6. おわりに

以上の検討を通じ、外国国名表記について表記の変更のあったものとなかったものに分かれた要因が指摘された。アメリカとフランスは前期においてそれぞれ「米」「仏」という表記を持ち、これが略称や複合語の形態素としても用いられていた。しかし1860年前後に起こった方言シフトによってこの表記は「美」「仏」に移行したのである。

1860年ごろに発生した方言シフトは、表記の基づく読音が広州音から非広州話に変化していった際に、対音としての正確さを維持するための措置であったと解釈できる。そしてこの変化の発生には、海外情報センターとしての上海の位置が重要な影響を与えていたのであった。

上海は南京条約後に開港したが、表記について影響力を発揮するのはメドハーストによる1843年の墨海書館設立後のことであった。墨海書館は1850年代を通じて宗教書のみならず、西学を紹介する文献の出版にも積極的に取り組み、他都市にある他伝教団体の印刷所を遙かにしのぐ数量の文献を出版したのである。それにもなあって上海音ないしは官話音を用いた表記が文献中における標準の表記として用いられ、1860年ごろには公文書においても用いられるようになるのである。以後、アメリカとフランスの表記においては、公使館の照会文書にも自国の称として「美」「法」が用いられるようになった。

一方で、方言シフトの影響を受けなかった表記も存在した。イギリスの表記がそれである。イギリスは19世紀前半からすでに「英」という字を用いていたが、もともとは広州音にもとづく表記であった。しかし「英」は他の方言での読音も比較的一定しており、それゆえに上海に西学東漸の中心が移り、方言シフトが発生してもその影響を免れることができたのである。つまり、他の方言での発音差が比較的小さいならば、旧来の表記であっても用いられ続け定着する可能性があることがわかる。

このことは1つの示唆をもたらすであろう。すなわち、外国地名表記における広州話の影響について、これまで感覚的に言われてきたほどには大きくはないという点である。従来、感覚的に我々は表記に及ぼした方言の影響について広州→上海→官話という変遷モデルを描いてきた。しかし、方言シフトによって徐継畚(1848)によれば「漢語の正音に非ざる」広州話を元とした表記は衰退させられた可能性が高いと考えられるのである。専門の検討は別稿に譲るが、実際には1850年代から広州話の衰退は始まっていたと見てよいであろう。つまり、南京条約後の中国語における外国固有名詞表記のモデルとしては、広州話が初期に一定の勢力を持っていたにとどまり、方言シフト後は非広州音——実際は上海話と官話という2つの言語が競う状況だったのではないだろうか。

こうした点についてはまだ課題も存在する。方言シフトの影響を免れる要因には方言による読音の差が比較的小さいという条件が挙げられるが、差の大小について具体的な基準がまだ明らかではない。また、方言の変遷モデルについてさらなる例証が必要である。加えて固有名詞表記中において地名以外の重要な一種、すなわち人名表記についてはどのような状況であったのか。これらの課題についてはまた別稿にて論じたい。

付記：本論は2002年6月の接触研第7回研究会での発表をもとにした。席上にて貴重なご意見を賜った荒川清秀先生、内田慶市先生をはじめとする諸先生方に感謝したい。

## 参考文献

- 荒川清秀 1997 『近代学術用語の形成と伝播 地理学用語を中心に』東京：白帝社  
 2000 「外国地名の意識——「劍橋」「牛津」「聖林」「桑港」——」『文明21』  
 第5号95～111頁
- 王 敏東 1992a 「外国地名の漢字表記をめぐって——「オーストラリア」を中心に——」  
 『待兼山論叢』第26号17～39頁  
 1992b 「外国地名の漢字表記について——「アフリカ」を中心に——」  
 『語文』第58号12～34頁  
 1994 「日本語におけるイギリスの呼称について」『台湾日本語文学報』  
 第6号211～237頁
- 佐藤 昭 1994 「民国以前の北京語音について」『北九州大学外国語学部紀要』  
 第80号15～26頁
- 沈国威編 2000 『『六合叢談』1858-59の学際的研究』東京：白帝社  
 沈国威・内田慶市 2002 『近代啓蒙の足跡』吹田：関西大学出版部



- 高田時雄 2000 「近代粵語の母音と表記」『東方学報』第 72 号 1～15 頁
- 若田部博哉 1985 『英語学大系 10-2 英語史 III B』東京：大修館書店
- 北京大学中国語言文学系語言学教研室編 1989 『漢語方音字彙』第 2 版 北京：文字改革出版
- 陳万成・莫慧嫻 1995 「近代広州話“私”“師”“詩”三組字音的演變」  
『中国語文』2 期 118～123 頁
- 曹先擢 2001 「普通話異讀審音表（二）」『語文建設』第 2 期
- 胡明揚 1978 「上海話一百年来の若干變化」『中国語文』第 3 期 199～205 頁
- 黄時鑒 1996 『東西洋考毎月統記伝』北京：中華書局
- 李新魁 1987 「一百年前的広州音」『広州研究』第 10 期 65～68 頁
- 熊月之 1989 「1843-1898: 上海与西学的伝播」『上海研究論叢』第 3 号 1～21 頁
- 1994 『西学東漸与晚清社会』上海人民出版社
- 詹伯慧・張日昇 1987 『珠江三角州方言字音対照』香港：新世紀出版社
- 張日昇 1986 「香港広州話英語音訳借詞の声調規律」『中国語文』第 1 期 42～50 頁
- 中国第一歴史檔案館・福建師範大学歴史系合編 1996 『中国近代史料叢刊統編 清末教案』  
北京：中華書局
- 中国史学会主編 2000 『中国近代史料叢刊 鴉片戦争』第 2 冊 上海書店出版社・  
上海人民出版社
- 周同春 1988 「十九世紀の上海語音」『吳語論叢』175～183 頁
- 愛漢者纂「東西洋考毎月統記伝」 『小方壺齋輿地叢鈔』再補編 第 81 冊
- 裨治文 1838 「美理哥国志略」『小方壺齋輿地叢鈔』再補編 第 84 冊
- 1853 『聯邦志略』
- 裨理哲 1856 『地球説略』
- 陳華等点校注釈 1998 『海国図志』長沙：岳麓書社
- 丁韜良編訳 1864 『万国公法』
- 丁韜良 1895 「三十一国志要」『小方壺齋輿地叢鈔』再補編 第 82 冊
- 馮桂芬 1861 『校邠廬抗議』（中州古籍出版 1998）
- 傅蘭雅編 1876-1892 『格致彙編』
- 傅蘭雅口訳・徐寿筆述 『化学鑑原』
- 傅蘭雅口訳・華蘅芳筆述 1874 『防海新論』
- 郭実獵 「貿易通志」『小方壺齋輿地叢鈔』再補編 第 81 冊
- 「万国地理全図集」『小方壺齋輿地叢鈔』再補編 第 82 冊
- 合信 1854 「博物新編三集」
- Kwong Ki Chiu (鄭其照) 1875 '字典集成 *An English and Chinese Dictionary Compiled from Different Authors, and Enlarged by the Addition of the Last Four Parts*' Hongkong, Chinese Printing and

## Publishing Company

理雅各撰 1856 『智環啓蒙塾課初步』

梁廷楠 1846 『海國四說』(中華書局 1993)

林樂知編 1868-1874 『教會新報』

1874-1883,1889-1907 『万国公報』

林則徐 「四洲志」『小方壺齋輿地叢鈔』再補編 第 81 冊

瑪吉士編 1847 「新積地理備考」『海山仙館叢書』第 113-118 冊

馬禮遜? 「外國史略」『小方壺齋輿地叢鈔』再補編 第 83 冊

慕維廉編譯 1853-54 「地理全志」『小方壺齋輿地叢鈔』再補編 第 84 冊

慕維廉譯 1856 「大英國志」『五洲列國志彙』18-19 冊

培端? 「地球推方圖說」『小方壺齋輿地叢鈔』再補編 第 69 冊

申報館 1874-1900 『申報』(上海書店 1983-1987)

(清)王韜編 1874 『循環日報』中華印務總局

偉烈亞力口譯·李善蘭刪述 1859 『談天』

(清)魏源 1842 『海國圖志』(岳麓書社 1998)

(清)謝清高·楊炳南、馮承鈞注 1955 『海錄注』上海:中華書局

(清)徐繼畲 1848 『瀛環志略』

宓思理撰 1854-1858 『中外新報』1-12 号

鐘叔河主編 1985 『走向世界叢書』長沙:岳麓書社

R. Morrison 1828 '廣東省土話字彙 *Vocabulary of the Canton Dialect*' Macao

E. C. Bridgman 1841 '*A Chinese Chrestomathy in the Chinese Dialect*' Hongkong

W. H. Medhurst 1842-43 '*Chinese and English Dictionary; Containing All the Words in the Chinese Imperial Dictionary, Arranged According to the Radicals*' Parapattan, Batavia

S. W. Williams 1844 '英華韻府歷階 *An English and Chinese Vocabulary, in the Court Dialect*' Macao, 香山書院出版 Office of the Chinese Repository

W. H. Medhurst 1847-48 '*English and Chinese Dictionary. in Two Volumes*' Shanghai, Mission Press

J. Edkins 1853 '*A Grammar of Colloquial Chinese as Exhibited in the Shanghai Dialect*' Shanghai, American Presbyterian Mission Press

S. W. Williams 1856 '英華分韻撮要 *Tonic Dictionary of the Chinese Language in the Canton Dialect*' Canton, 中和行出版 Office of the Chinese Repository

J. Chalmers 1859 '英粵字典 *An English and Cantonese Pocket-Dictionary, for the Use of Those Who Wish to Learn the Spoken Language of Canton Province*' Hongkong

Wilhelm Lobscheid 1866-69 '英華字典 *English and Chinese Dictionary with the Punti and Mandarin Pronunciation*' Hongkong, Daily Press Office

T. Wade 1867 『語言自邇集』

E. J. Eitel 1877 *'A Chinese Dictionary in the Cantonese Dialect'* London, Lane Crawford & Co.

J. Chalmers 1878 *'英粵字典 An English and Cantonese Dictionary, for the Use of Those Who Wish to Learn the Spoken Language of Canton Province'* Hongkong, De Souza & Co.,

J. Edkins 1869 *'A Vocabulary of the Shanghai Dialect'* Shanghai, Presbyterian Mission Press

J. Doolittle 1872 *'英華萃林韻府 A Vocabulary and Hand-Book of the Chinese Language, Romanized in the Mandarin Dialect. in Two Volumes Comprised in Three Parts'* Rozario Marcal & Co., Foochow; Trubner & co., London; Anson D. F. Randolph & co., New York; A. L. Bancroft & Co., San Francisco

P. P. Rabouin 1878 *'Dictionnaire Français-Chinoise, Dialecte de Song-kiang, Chang-hai, etc.'*

P. P. Rabouin 1883 *'Leçons ou Exercices de Langue Chinoise Dialecte de Song-Kiang'* Zi-Ka-Wei Imprimerie de la Mission Catholique, a L'orphelinat de Tou-Se-Ve

D. H. Davis & J. A. Silsby 1900 *'Shanghai Vernacular Chinese and English Dictionary'* Shanghai

K. Hemeling 1902 *'The Nanking Kuan Hua'* Shanghai, The Statistical Department of the Inspectorate General of Customs

J. A. Silsby 1907 *'Complete Shanghai Syllabary with an Index to Davis & Silsby's Shanghai Vernacular'*

D. H. Davis 1910 *'Shanghai Dialect Exercises in Romanized and Character with Key to Pronunciation and English Index'* 上海徐家匯土山灣印書館 Shanghai T'usewei Press

D. H. Davis 1913 *'An English-Chinese Vocabulary of the Shanghai Dialect'* American Presbyterian Mission Press. Shanghai

#### 注釈

注1 これには国名としてのアメリカと大陸名としてのアメリカと二つの対象が分けられることなく用いられている時がある。管見のかぎりこの2つを厳密に表記し分けている文献はないので、本論ではこの二つを表記の対象として区別しない。

注2 「花旗」は星条旗に由来し、広州話で[fa<sup>53</sup>k 'ei<sup>21</sup>]という発音を持つが、これはもはや America または United States of America という原語の発音とは関連を持たない。星条旗について中国語による最も早い解説には管見の限り『東西洋考毎月統記伝』1838年6月の記事がある。黄時鑒 1997: 241。

注3 [r]はアメリカの発音の場合は歯茎接近音、フランスの場合は有声口蓋垂摩擦音を表わす。以下同。

注4 裨治文(1838)における「美里哥」のような3字の表記も存在した。

注5 その他の主な表記は「墨」が前期:後期=5:1、「彌」が4:0、「未」が1:0、「麦」が1:0、「黙」が5:0となる。なお、調査した文献については参考文献参照。

- 注6 その他の表記としては「合衆国」が後期に3例、「花旗」が前期に4例見いだされる。なお、ここでは「一国」「一人」などという複合語を構成する場合の表記も含めている。以下同。
- 注7 廈門、福州など [f] が音系中にない方言もある。
- 注8 現代普通話では [fo<sup>35</sup>] という読音になっているが、ここでは [fu<sup>35</sup>] を記す。また、北京土話では「法国」には [fa<sup>51</sup>] という読音を用いていた。曹先擢 2001。
- 注9 例えば「甲万師傅」「母舅」といった方言語彙が見いだされる。{沈・内田 2002 : 65} また、方言語彙は改版するごとに削除されているという。{Ibid. : 22}
- 注10 熊月之 1994:184-188
- 注11 蘇精 2000:233-234
- 注12 Ibid. : 230-231
- 注13 熊月之 1989:5
- 注14 熊月之 1994:144
- 注15 調査に用いた文献は中国史学会 2000 (第2冊) : 87-364 に収める「鴉片奏案」「林文忠公政書」「信及録」である。
- 注16 庚韻と同用できる清韻の影母字には「嬰」「瓔」「纓」など7字が存在する。
- 注17 張日昇 1986:48-49。ただし3字語声調全体のパターンには一致しない